

芥川龍之介における母性認識

—初期の母性描写の抑制から後期の母性謳歌へ—

麥 媛婷

1. はじめに

芥川龍之介の母性認識は屈折したと言える。彼が生まれてまもなく実母ふくが発狂してしまった。実母の発病の原因で、龍之介は養父母と伯母によって養育されることになった。母親の愛情を一度も感じたことがない芥川は、実母が亡くなったことによって永遠に母親に甘える機会がなくなった。その理由であろうか、芥川が母性に対する認識が歪んでおり、つまり母性に対する抑制な感じを持っていた。本稿では、まず芥川龍之介の家族を紹介して、それらの身内の人は彼の人生にどんな影響を与えたのかを示す。文学作品には作家の性格、思想や人生を反映しているのだから、次に、芥川の初期、中期前半、中期後半、後期の各時期の中の重要な作品を通じて、母性認識の道程に彼の心境はどのような変化したかを分析してみる。それから、芥川にとって曲がり角とは言える作品は何であろうか、彼はどのようにして生の溯行をたどるのか。最後、後期の芥川は一体母性に対してどんな認識があるのか、彼の心に潜んだ理想的な母性像はどんなイメージのものなのかを究明するのは本稿の目的である。

2. 芥川龍之介の家族（実母、伯母を中心に）

芥川龍之介は明治二十五年（1892）三月一日に東京市京橋区入船町で、新原敏三、ふく夫婦の長男として生まれた。新原夫婦は初、久、龍之介三人の子供を生んだ。龍之介の実父新原敏三は、牛乳や乳製品を商う新興実業家であった。実母ふくは、士族の家柄である芥川家から出て、内気な気質の人であった。しかし、芥川龍之介が生まれて七ヶ月（1892年10月）頃、実母ふくが発狂してしまった。ふくが発狂した原因は大体以下のいくつか考えられる。①長女初は、明治二十四年四月に、急性脳膜炎で夭折した。七歳の初を失ったことはふくにとって、きっと深い自責に陥るに違いない。②龍之介は大厄の年（父四十二歳、母三十三歳）に生まれた子であった。そのため、彼を当時「捨て子」として育てねばならなかった。③森啓祐氏は「龍之介誕生の年に、敏三と他の女性の間には敏二という私生児が生まれ、それがふくが発狂に関係しているのではないか¹と推定した。以上三つの重要な原因で、ふくは肉体も心理も重圧を持って、最後は狂人になって

しまった。ふくが発狂した後、新原家の二階に生活を続け、龍之介十一歳のとき亡くなった。しかし、ふくが発狂は龍之介に大きな影響を与えた。狂人の子であるため、自分もいつか狂気になるのではないかと龍之介は常に怯えていた。そうした恐怖感と共に、体が弱まった事も、芥川の自殺の原因の一つと思われる。

実母の発病の原因で、龍之介はまもなく実母の兄—芥川道章（龍之介の養父）の家に入った。養父母も文学、画を好んで、こういう家庭生活の雰囲気の影響された龍之介は、作家になるのは自然の成り行きだと言える。明治三十七年八月、新原家の相続人廃除手続きを経て、龍之介が戸籍に芥川家の養子になった。

次いで、龍之介の伯母ふきについて述べたい。彼はもっとも愛した人は伯母だと考えられる。龍之介を可愛がった伯母について、「文学好きの家庭から」という作品に、芥川は「伯母がゐなかつたら、今日のやうな私が出来たかどうかわかりません。」²と述べた。これを見ると、芥川は伯母に対する愛と感激は確かである。しかし、二人が愛し合いながら互いに傷つけた。吉田精一は「自殺を決意した後に芥川は佐藤春夫に、「僕の生涯を不幸にしたものは××なのだ。もっともこの人は僕の無二の恩人なんだがね」（是亦生涯、改造昭和二年九月）と語ったという。この××は伯母をさすものに相違ない。」³と指摘した。氏の指摘を踏まえ、そのときの芥川は伯母の愛がエゴイスチックなものだと分り、その悟りによって彼は肉体と心の苦痛を感じ、次第に伯母に対する愛が冷めてしまったのではないかと私が考えたのである。

以上の紹介から見れば、家族は芥川の生活に大きな影響を与えた。その中で、特に実母と伯母は芥川龍之介の作品及び生涯に与えた影響が一番深く、龍之介にとって不可欠な二人だと考えられる。

3. 芥川龍之介における母性認識

3.1 初期—母性描写の抑制（「手巾」）

「手巾」は大正五年（1916）『中央公論』第三一年第一号に発表された。梗概は以下である。

長谷川謹造は、東京帝国法科大学教授であり、近代日本の精神墮落を救済しようと思い、その助けとなれ

るのは日本固有の武士道だと、長谷川は考えている。ある日、西山篤子という婦人が尋ねてきた。彼女の息子は長谷川の教え子であり、入院したが病死になってしまった。婦人は息子の死を報告に来た。長谷川は婦人の平静な態度と微笑みなどについて不思議だと思っているが、不意にテーブルの下に、手巾を握りながら震えている西山夫人の手を見ると、婦人は自分の感情を抑えていることが分かった。長谷川は、これは日本の女の武士道だと賞讃しながら、その後、読みかけのストリンドベルグが、顔は微笑みながら手は手巾を裂くという二重の演技を臭味と名づけるということを知り、長谷川の心は乱された。

三好行雄は「強いていえば、『手巾』に子どもの死を悼むに西山夫人は、自然な母性を封殺するステロタイプな人生的演技を選ぶことのみ、『型』の美を実現できた。」と⁴論じた。まず西山夫人の自然の母性を封殺することについて述べたい。我々人間は元々各種の情緒があり、自分の情緒を永遠に同一状態を維持するのは、元々無理であろう。西山夫人の息子がなくなった。もし彼女はこの原因で悲しくて堪らなくて泣いたなら、これも合理的な反応であろう。しかし、その時の西山夫人は悲しんでいるのに平静な様子を装っていた。全身で泣いているのに顔は笑っている。過度の抑制は人間の情緒や母性を全部封殺することはあまりにも不自然であり、賛成しかねる。

次は、西山夫人の『型』の美について、浅野洋氏は「人性の弱点の、酷烈なる試練に際して生ずる日本人の笑癖を悲哀憤怒を抑へて、心の平衡を得しむるものと称揚する新渡戸の見識は、息子の死を語って口角には、微笑さへ浮べていた西山夫人の態度にこそ最も適しい実例のひとつを見出せるだろう。」⁵と述べている。西山夫人の微笑みと抑制な態度はいわゆる日本の女の武士道であり、新渡戸稲造の武士道精神だとも言える。それに、『手巾』に登場する主人公長谷川謹造先生が、新渡戸稲造をモデルとすることはよく知られていることである。しかしながら、三好行雄は「手巾の〈表だつた〉主題が型と化した人生態度の拒絶にあり、近代の醒めた眼による武士道の批判というテーマは明確である。」⁶と述べた。ということは、当時の芥川自身は西山夫人のように「型」にはまった人間としての「臭味」を感じていたと思われ、武士道への一つの批判と考えられる。私見では、西山夫人の型の美は、それは長谷川謹造、あるいは新渡戸稲造の考えの中の「美」であり、決して芥川にとっての美ではない。また、こういう型の美は、端正と礼儀の裏に、偽装な感じがあると思われる。何故自分の感情を抑え、母性

を自然に流露せず、ただ型の美あるいは武士道精神を追求するかが理解しにくい。

武士道に対する批判は「手巾」のポイントであるが、この作品から芥川龍之介と西山夫人の共通点も見るができる。例えば、母子感情に対する抑制と自然な感情を流露せないということがある。しかし、彼等は母子感情を抑制する原因は同じものだと見なしてはいけない。西山夫人は新渡戸稲造の克己と武士道精神を体現するため、自然な母性を封殺した。一方、芥川龍之介は幼いから実母の発狂と母欠如のせいで、母性に対する愛の渴望を抑制して、恐怖を感じている。この原因によって、彼の初期作品に殆ど「母」を登場させることをしていないと思われる。

3.2 初期作品の例外（「偷盗」）

「偷盗」は大正六年（1917）、『中央公論』四月号と七月号に発表された長編小説である。芥川龍之介の初期作品は母性描写に対して抑制したが、「偷盗」の中から、母性描写の禁忌ではなくて、逆に当時の芥川は無意識の心の底に作られた「理想的な母性像」が窺える。ということは、作中人物—阿濃の救済者及び無垢の姿を浮かび上げた。

まず、救済の問題について究明したい。「偷盗」の構造は、羅生門の下人の行方を問いながら、畜生道に墮ちた人間を救済しようとする概念で成立したものである。そして、救済者の位置を与えられたのは、白痴に近い下衆女—阿濃である。阿濃は猪熊の爺に対する救済について、三好行雄は「阿濃の〈母〉は確実に猪熊の爺を救済した。第八節、猪熊の死を描く作者は、かれに〈不思議な微笑〉をゆるした。阿濃の生んだ赤ん坊の指に触れながら、猪熊の表情には〈秘密な喜びが、折から吹き出した明け近い風のやうに、静に、心地よく、溢れて来る〉」⁷と述べた。三好氏の論点に異議はない。阿濃は確かに猪熊の爺を救済したと思われる。猪熊の爺は死の前に自分と阿濃の赤ちゃんに触れながら、過去の自分は本当に大悪人であり、許すことのできない大きな罪を犯してしまったことに気づいた。ここは母親としての阿濃は父親としての猪熊の爺に対する許すとも言えるであろう。阿濃の生んだ赤ん坊を通じて、猪熊の爺はその一瞬、自分の罪を知り、悔悟した。彼はやっと畜生道から人間の道路に戻ることができた。猪熊の爺は死ぬ前に「不滅な黎明」を見た。「不滅な黎明」は救済の光、希望の光だと考えられ、彼はその光へ歩き出していた。そのほか、太郎・次郎二人も沙金に愛慕の意を持っているので、兄弟はこのために対立することになった。海老井英次は、そのエゴイズムを太郎、次郎の兄弟愛が超克したのは通

俗的、安易に過ぎた低次元の解決である⁸と述べた。ということは、阿濃は太郎と次郎を救済する存在ではない。阿濃は太郎と次郎に対する救済は失敗した。しかしこの論点については賛成しかねる。私見では、太郎と次郎の対立の原因は二人も沙金に愛慕の意を持っているので、彼等の対立と和解は阿濃と直接に結びつきにくい。阿濃が太郎と次郎の救済者として登場するとは言い切れないので、太郎と次郎に対する阿濃の救済は失敗したとも言えないだろう。また、「兄弟愛」で彼等のエゴイズムと対立を止揚したのは適切な解決方法だと思われる。兄弟の血縁関係が元々深く、男女の愛を超えていると言える。愛のせいで眼が遮られた太郎と次郎は、沙金は悪女とは気付かなかつた。幸い、最後二人は兄弟愛が自然に湧いて沙金を殺したのが正確な選択だと思われる。阿濃は「偷盗」に救済の試みは失敗するかどうかにもかかわらず、仁平道明は「偷盗」の作品世界には、〈救済〉の可能性が示されていたのではないかと述べている。私見では、確かに阿濃が猪熊の爺を救済したと思われるが、阿濃が太郎と次郎の救済者として登場するとは言い切れないので、太郎と次郎に対する阿濃の救済は失敗したとは言えないだろう。と言うことは、作品のなかにおいて阿濃が救済しようという試み、その努力してみた姿が伺える。

阿濃の母性救済以外、彼女の完璧、無垢な母性像もよく描かれている。例えば、盗人たちはよく阿濃を打ち、嘲笑して、猪熊の爺も酔った勢で、彼女を悪戯した。さらに、沙金は気持ちが悪く、阿濃の髪の毛を掴んで、ずるずる引くこともあった。しかし、人間の苦しみを味わった阿濃は一人で泣いてもずっと我慢して歩いていた。ただ一度だけ、阿濃が我慢できなかったのはある日、猪熊の爺が彼女に墮胎薬を飲ませようと脅したとき、彼女は必死に抵抗した。ここから阿濃は母として、どんなことがあっても赤ちゃんを守りたいという母愛を示したととらえられるだろう。そして、腹の中の児は猪熊の爺の子にもかかわらず、阿濃は心の中から胎児が次郎の子だと信じていて、母になる喜びだけを感じている。ある日、阿濃は羅生門の楼上に佇んで、腹の中の胎児を慰めながら、細い声で歌った。

唄をうたいながら、遠い所を見るような眼をして、…、人間の苦しみを忘れた、しかもまた人間の苦しみに色づけられた、うつくしく、傷しい夢である。(涙を知らないものを見る事が出来る夢ではない。) ここでは、一切の悪が、眼底を払って、消えてしまう。が、人間の悲しみだけは、——空をみだしている月の

光のように、大きな人間の悲しみだけは、やはりさびしく厳に残っている。……

なよや、末の松山

浪も越えなむや

浪も越えなむ¹⁰

以上の引用から見ると、阿濃は母親として崇高な魂があり、人間の苦しみを忘れ、さらに苦しみに色づけられたという永遠の存在である。その清らかで美しい点が聖母マリアと重なっていると考えるのも可能であろう。芥川龍之介は実母の欠如で、初期作品に母性描写を抑え、禁忌があり、「母」をあまり登場させないと思われるが、「偷盗」は初期作品の一つの例外だと考えられる。阿濃を通じて、芥川の心の深層に封じこめられていた無垢な母性像が窺える。

3.3 中期前半—母性の恐ろしさ

3.3.1 「女」

大正九年(1920)五月一日、雑誌『解放』第二巻第五号に発表された小説である。真夏の日光の下、紅い庚申薔薇の花の底に潜む雌蜘蛛は、獲物を見つけると噛み殺してしまう。こうした行為が何度も繰り返している。やがて雌蜘蛛は巣を作り、産卵して、仔蜘蛛が誕生した後、母蜘蛛はだんだん衰えて、巣の中で死んだ。作品の中に、雌蜘蛛は命の灯が消えるまで、全力を尽くして仔蜘蛛を見守っていた。これはおそらく現実生活の中で、芥川は父親になった(長子比呂志の誕生)ということと関連があると考えられる。妻塚本文が子供を可愛がっていることを見て、母愛の偉大を感じた。依って、これは天職を果した雌蜘蛛の限りない歓喜を感じながら死ぬという母性愛が「女」に投影したと考えられる。一方、本文の前半部には雌蜘蛛がどうやって獲物を噛み殺すという「悪」の一面が描かれている。つまり、「女」の中に、雌蜘蛛の二面性を見出すことができる。ある時は慈愛であるが、一方、ある時は無残な一面も持っている。芥川龍之介は中期前半に母性描写についてまだ恐ろしさ、強さという感じがあるので、母親は二面性の雌蜘蛛に暗喩されていると考えられる。これについて、片岡哲は「こうした雌蜘蛛の存在によって、真夏の明るい光の中の美しい花の内側にも恐ろしいことの潜んでいるのを示した芥川は、憂いに沈んでいるような女の内側に殆ど『悪』それ自身のやうに、殺戮と掠奪を好み、それを勝ち誇る残忍さの存することをも示し、女は地獄の使いとか外面如菩薩、内心如夜叉を実証する。」¹¹と言っている。私見では、雌蜘蛛は仔蜘蛛を見守っているが、生きていくため、あるいは獲物を獲得するために、残酷な悪者になってしまった。もし同じ状況を人間に置き

かえれば、母親が自分の子を可愛がるのは当然のことであるが、生活周囲に気を配り、あるいは子供のために、女の裏の無残な一面を見せてしまうのはやむを得ない事ではないだろうか。芥川龍之介のほかの作品、「あばばば」にも同様な概念がある。言い換えれば、母は恐ろしいものだと思われていたのではないだろうか。

三好行雄は『芥川龍之介論』に雌蜘蛛について、「(母)は(女)のひとつの属性として、彼女のもうひとつの属性である(悪)と相対化されることで、あやうい均衡を保っている。」¹²と述べた。確かに、慈愛と悪との両面性の中に、均衡点を維持するのが難しいことである。この作品の中では母親が子供に対する慈愛、無償の愛より、母性像の裏に潜んだ無残、虐殺などの「悪属性」の方が比較的に高いと思われる。

また、「女」という作品のキーワード、例えば、「雌、女、出産、薔薇、悪」などの言葉から、ジェンダーやお互いの繋がりを見ることができる。すわなち、「女=悪」ということを暗示していると思われる。当時の芥川は母性観にこんなイメージを持った原因は言うまでもなく、彼の出生七ヶ月から実母の発狂と母欠如、伯母の厳しい教育などから、いつの間にか芥川は母性に対する恐ろしい感じを生じた。また、雌蜘蛛に托して、実は女も残虐、悪の一面があることを暗示している。そのほか、例えば、秀しげ子は利己主義、動物的本能の悪女に属している。彼女も『或阿呆の一生』の中の「彼女」、「狂人の娘」、「復讐」に登場させたとよく指摘されている。ここから見ると、芥川龍之介は身内の人あるいは交渉を持った女性のイメージは、作品の中に見られると思われる。

3.3.2 「母」

大正十年(1921)九月一日『中央公論』に初出した作品である。夫の仕事で、野村敏子と夫は中国上海の旅館に泊まった。同じ旅館の二階の部屋の隣には、赤ちゃんをあやす女がいた。しかしよく隣の赤ちゃんの泣き声を聞くので、亡くなった自分の赤ちゃんのことを思い出したくないため、敏子は夫に願って三階を移した。翌日、敏子は二階の女に会って、話を交わした。二階の女は敏子に同情しながらも、「得意の情」を持っている。その後、敏子が夫と蕪湖へ移した。ある日、二階の女からの便りが届き、赤ちゃんが死んだことを書いている。しかしながら、敏子は「あの赤ちゃんの死」に嬉しく感じたという。

この作品から、母性の悪属性を感じることができると。引き続き、「隣の女」と「敏子」二人の性格から分析してみる。

まずは隣の女について、①最初に彼女は女中から敏子の赤ちゃんを亡くしてしまったことを聞いて、彼女は「*かすかな憂鬱の色を浮べた。が、すぐにまた元の通り、快活な微笑を取り戻すと、悪戯そうな眼つきになった。*」¹³という様子を表す。ここから見ると、隣の女はエゴイスチックな人だと見なして好いだろう。彼女の考えでは、どうせ死んだのは自分の赤ちゃんではなくて、敏子の赤ちゃんだから、少しだけ憂鬱の色を浮かべたが、すぐ微笑むことができる。②敏子に会った日、最後に赤ちゃんを抱いている隣の女は「*その乳房の下から——張り切った母の乳房の下から、茫然と湧いて来る得意の情は、どうする事も出来なかったのである。*」¹⁴隣の女は、母親になる喜びを感じながら、自分は敏子のなかったもの—「赤ちゃん」を抱いて、あやすこともできるので、得意の情が漏れている。隣の女はエゴイスチックな人のように造型されてはいるが、敏子と話を交わしたとき、敏子の赤ちゃんの死に憐憫する一瞬の善良な部分もあった。例えば、隣の女は敏子に気の毒そうにつけ加えた。

「*御宅ではとんだ事でございましたってねえ。*」、,,,,,,,,,

女の眼にはいつのまにか、かすかに涙が光っている。

「*私なぞはそんな目にあったら、まあ、どうするでございましょう?*」¹⁵

ここから見ると、隣の女はエゴだが、少なくとも敏子の赤ちゃんの死に対して憐れむ情が無意識に現れたので、完全な悪女とは言えない。

次は敏子について分析する。三好行雄は、「死んだわが子を悼む母の悲しみは、、、彼女の(酷薄な)微笑は、夫を脅えさせる。(母)は(悪)と隣りあわせに、(女)の心性のうちに住んでいたのである。」¹⁶と論及した。この作品に、自分の赤ちゃんを死なせた敏子はかわいそうであるが、彼女はいわゆる悪属性の母だと言える。①最初に敏子はよく隣室の赤ちゃんの泣き声を聞いていた。その声を聞いて、死んだ自分の赤ちゃんへの思いを抱えていた敏子は、隣室の赤ちゃんの泣き声に耐えられず、嫌な思いをしていた。②敏子はある日二階の女に会って、話を交わすとき、彼女は隣室の赤ちゃんに敵意があるのに、わざとあの赤ちゃんはいつ生まれたのかと聞く。これは敏子の病態心理だと言えるであろう。そして、隣の女が赤ちゃんをあやしている様子が敏子にとって、目障りで、思わず嫉妬の気持ちが湧いてきたと考えられる。③隣の女の便りから、隣室の赤ちゃんも死んだことを聞いた敏子は、同情あるいは憐れむ気持ちどころか、逆に

ほとんど平静を失した、烈しい幸福の微笑である。男はこの時妻の微笑に、何か酷薄なものさえ感じた。¹⁷

ここに敏子の悪属性を見ることができる。何故かという、敏子の考えでは、自分の失ったもの（赤ちゃん）は、ほかの人に得てほしくない。隣の女は子供が死んだので、これからは赤ちゃんを抱いて、あやすことができなくなった。隣の女もやっと自分と同じく悲しくてたまらない気持ちを体験せざるを得ないことになった。敏子はこのことを思いながら烈しい幸福の微笑を浮かべた。このときの敏子は悪女に属している。④また、敏子は隣室の赤ちゃんの死を悼むために、自分の大事な文鳥を放してやればいいんじゃないかと夫に提議したが、この提議は不合理だと思われる。彼女は隣室の赤ちゃんの死を悼むためではなく、あの赤ちゃんの死を祝うために文鳥を放したいという可能性もあると思われる。

敏子も隣の女も神経質、気の狭い、嫉妬心などの性質が窺える。特に敏子の行為はもっとも「悪」だと思われる。これに対して、夫は作品の中に中立、公平な立場から物事が判断できる。芥川龍之介の中期前半の作品からまだ母性に対する恐ろしさが窺える。

3.4 中期後半—母性思慕

3.4.1 「少年」

「少年」は、『中央公論』の大正十三年（1924）四月号、五月号に分載された作品であり、保吉物の一つである。芥川龍之介が生いたちを描いた最初の作品である。三好行雄は「挿話の連続によって〈生〉の断面を綴るという手法自体に大きな変化は示されないが、それにしても、〈三十年前の保吉〉を〈三十年後の保吉〉に二重写しにして見る。」¹⁸と述べている。ということは、二重写しによって、保吉（あるいは芥川）の生の根源を溯行して、確かめたいという自覚が見える。また、主人公保吉と芥川との間に、一体どんな繋がりがあるか。これは後述でまた説明する。「少年」には（一）クリスマス（二）道の上の秘密（三）死（四）海（五）幻燈（六）お母さん、という六つの短編から構成されている。（一）～（五）は母性像と直接な関連性がないので、ここでは母性観が織り込まれていると思われる（六）の「お母さん」に焦点を合わせ、その母性像を究明してみる。

「六、お母さん」は保吉の八、九歳の秋のことで、敵人が追い付いてきたと思いながら、保吉は石に躓いて転んで鼻血にまみれ、泣き続けた。仲間が「やあい、お母さんって泣いていやがる」と保吉を嘲笑して、けれども保吉には「お母さん」と言った覚えはなかった

ので、彼等は嘘をついたと思った。その後数十年が経って、丁度三年前、上海の病院で静養したとき、保吉が目覚めた後、看護婦は保吉にさっきお母さんと呼んだじゃないでしょうかを伝えた。そのときの保吉は八、九歳のことを思い出して、あのときの仲間が彼を騙さなかったかもしれないと思い、ただ自分が覚えなかった。つい「お母さん」を呼んだことを気がついた。

一般的に言えば、我々は苦しいときあるいは恐ろしいことに遭うとき、よく「お母さん」と、つい呼びかけてしまうだろう。お母さんと呼んでも、母がすぐそばに来てほしいのではなくて、ただ母は暖かい象徴であるので、恐いとき「お母さん」と呼んだら、自分の心が落ち着き、平静になるのである。従って作中の主人公—保吉も八・九歳の恐いとき及び三年前の病気の苦しいとき、二回とも無意識にお母さんと呼びかけたと考えても不思議ではないことであろう。

次は保吉と芥川龍之介との関連性について述べた。三好行雄は「泣きながら無意識に母を呼ぶ少年のこえに、芥川龍之介における宿命の根源があった。その一点で、堀川保吉を芥川龍之介におきかえる自由もまた、読者に許される。」¹⁹と論じた。また、芥川は「澄江堂雑記」（大正11年4月初出）に「僕の小説は多少にもせよ、僕の体験の告白である」²⁰と指摘した。以上の研究から見ると、芥川がいわゆる保吉のモデルであることは明らかであろうとなると、その無意識に「お母さん」を呼ぶのは実母への呼びかけではなかろうか。これについて、三好行雄は「現実の母ではなく、無意識の闇にひそむ仮現の母である。」²¹と述べている。

筆者はこの観点に賛成する。何故かという、芥川が出生した七ヶ月後、実母が狂人になってしまった。彼は養父母、伯母によって養育されたので、実母との接触が少なかったのはいうまでもない。実母から母性愛を実感しなかった芥川は怪我したとき、実母を呼んでも、実母は自分のそばにいない。そのゆえに、彼は心の中に理想的な母性像を描いていたと思われる。この母性像は「偷盗」の阿濃あるいは「捨児」の母のような無垢、完璧なイメージである。この母性像は実母を超えて、芥川は苦しいときや恐ろしいことに遭ったとき、実母を呼ぶより、この無垢、理想的な母性像を呼んだほうが心が落ち着くかもしれない。従って、芥川の無意識に呼ぶお母さんは「仮現の母」であり、実母ではないと考えられる。

芥川は初期、中期前半に母性描写に対する禁忌、恐ろしさがあるが、中期後半に一変したことは明らかで

あろう。例えば、「少年」という短篇作品から「母性思慕」を十分に感じられる。芥川にとって、母親の重要性が少しずつ浮んできたことが窺える。

3.4.2 「大導師信輔の半生」

「大導師信輔の半生」は大正十四年一月一日の『中央公論』に掲載した半自伝的作品である。この作品には芥川と思わせる信輔を主人公として、芥川の生の溯行の過程に欠かせない一編である。全文は「一」本所、「二」牛乳、「三」貧困、「四」学校、「五」本、「六」友だち、という六章から成り立ったものである。本発表は「二、牛乳」に焦点を絞り、さぐっていく。

「二、牛乳」に、主人公信輔の母は体が弱いので、信輔が生まれて以来、母の母乳を一度も吸ったことがない。これは生まれてから母乳を吸ったことのない芥川龍之介自身の経験とそのまま重なっているゆえ、信輔が芥川自身だと見なしても差支えがないだろう。一方、芥川は実母がかつて狂気であったことを作品には投影しなかった。ただ「信輔の母は体が弱い」という設定に置き換えた。ここから見ると、芥川は作品の中に実母のことを告白しようとしたが、告白の衝動を抑制して終わってしまったのである。作品に戻ると、信輔は母乳を吸ったことがないことについて気になり、一つの恥だと思った。自分の体の弱いことも牛乳のせいと彼はずっとそう確信していた。その原因で、少しでも弱みを見せたが最後、この秘密を友達に見破られない為にどういふ時でも挑戦に応じた。例えば、

ある時はお竹倉の大溝を棹も使わずに飛ぶことだった。ある時は回向院の大銀杏へ梯子もかけずに登ることだった。ある時はまた彼等の一人と殴り合いの喧嘩をすることだった。、、、しかし彼はその度に勇敢にそれ等を征服した。、、、このスパルタ式の訓練は彼の右の膝頭へ一生消えない傷痕を残した。²²

「母乳を知らないこと」は信輔に暗い陰影の深刻さが彼に刻まれていることを証した一節である。この段落は信輔の経験であったが、これも芥川自身の心境描写そのまま投影していると言える。彼の心の中のコンプレックスのせいで母乳を吸ったことがないのは一種の恥であり、劣等感と思われていた。芥川にとって、母乳を吸ったことがあるかどうかによって、母愛の温みを感じたかの判断基準かもしれない。つまり、母欠如の芥川にとって、母乳を知らないことはいわゆる母愛に欠けると思われる。従って、芥川の心底に母性に対する期待や憧れがここから見る事ができる。彼は母性思慕の心理の一面も見せていると考えられる。

その後、信輔は西洋史に、*羅馬の建国者ロミュル*

スに乳を与えたものは狼である。²³を読んだ。母乳を吸ったことがない人は自分だけではなくて、ほかに同じ状況の人もあり、ロミュルスは母乳を知らなくても偉大な人になれたと信輔が思っている。これは自己を慰めているかもしれない。信輔は母乳を吸ったことがないことについて少しずつ気にしなくなった。中学時代の信輔はある日叔父の経営する牧場へ行って、牛の顔を見たとき、

ふとこの牛の瞳の中に何にか人間に近いものを感じた。空想?—あるいは空想かも知れない。が、彼の記憶の中には未だに大きい白牛が—頭、花を盛った杏の枝の下に柵によった彼を見上げていた。しみじみと、懐しそうに。…………²⁴

以上の段落について、菊地弘は「恋する母の姿が「精神的風景」の内に擬人化された白牛に託されている」²⁵と述べた。私見では、牛の瞳から人間に近いものを感じられるので、ここは寓意があるに違いない。もし信輔を芥川と見なすなら、芥川は擬人化された白牛の瞳から子供に対する母親の優しい目付きを感じられたと思えるだろう。ここに描かれた母子感情によって、もう一度芥川の母性思慕が証明された。

「大導師信輔の半生」で「少年」のテーマが深化されたと見るのが一般の通説であるが、宮坂覺氏の考えでは、「大導師信輔の半生」は「縦割りの方法には屈折があり、虚構化があり、〈告白〉という視点では「少年」より後退している。」²⁶と指摘した。この評論について、まだ討論する余地があると考えられる。私見では、芥川は「大導師信輔の半生」で母親のことを告白したが、最後は言い出せなかった。しかし、彼は従来ふれなかった自己の生い立ちに纏われた宿命を語りはじめ、生に潜んでいた謎、不可解な部分を探ってみた。少なくとも一歩を踏み出したと言えるであろう。従って、宮坂覺氏の論点については賛成しかねる。

3.5 後期—理想的な母性像

3.5.1 「点鬼簿」

「点鬼簿」は大正十五年十月一日『改造』第八卷第十一号に発表された作品である。芥川はこの作品でやっと自分の母は狂人だったと語り、始めて自分の生い立ちについて真正面から見つめる事が出来たと言えるだろう。これは彼の作品と人生の重大突破だと言える。登尾豊は「苦境にあって出生にまで溯って自分の来し方を振り返り、、、母を求める心境は現在のものではあった。過去を反射鏡として現在を照らすところに点鬼簿の切実なモチーフがある。」²⁷と指摘した。確かに、芥川は「少年」「大導師信輔の半生」で自分の人生にまつわることを多少にも描かれたが、実母の狂

気について終始隠している。しかし、「点鬼簿」に、芥川は母の物語と我々を誘うことになった。つまり実母は狂人であることをやっと告白した。また、この作品で芥川は意識的に実母、実父、姉との思い出や彼らの死を描いて、それを「反射鏡」として、彼は身内の人に対する深層認識ができて、特に実母のイメージが浮き彫りになる。もし読者がこの作品を読み解けば、「点鬼簿」が持った真の意味を理解することができると思われる。本発表では、(一)母、(二)姉、(四)墓参りとこの三つの部分に重点をおいて究明してみる。

(一)の部分は、「母」を持たない不幸を述べた。僕
の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親し
みを感じたことはない。²⁸本文の最初から長く隠され
た秘密をストレートに告白した。淡々と語り、自分の
情感をあまり加えないで、いわゆる他人の話述べた
ようである。次いで実母の外見や行為を描いた。

僕の母は髪を櫛巻きにし、いつも芝の実家にたった
一人坐りながら、長煙管ですばすば煙草を吸っている。
、、、土口気泥臭味の語に出合った時にたちまち
僕の母の顔を、——瘦せ細った横顔を思い出した。こ
う云う僕は僕の母に全表面倒を見て貫ったことはない。
何でも一度僕の養母とわざわざ二階へ挨拶に行っ
たら、いきなり頭を長煙管で打たれたことを覚えている²⁹

狂気の実母はいつも気力がなくて、灰色の顔をしている。泥臭味もあり、時々長煙管を持って人を攻撃する行為もあった。子供の時代から伯母に養育された芥川は実母とは親しくななかったので、実母の外見や行為にたよって母親のイメージを作るしかできなかった。ある日実母が危篤という電報を聞いて、養母は芥川を連れて実家に帰った。その日芥川は南画の山水を描いた薄い絹の手巾を巻き付けていた。山水画の手巾やアヤメ香水など細かいところまで潤色して描写することから芥川の芸術家性格が見られる。家に帰って、危篤の実母を見ると、芥川は最初の日に涙を流したが、次の日の夜は

なぜかゆうべのように少しも涙は流れなかった。僕はほとんど泣き声を絶たない僕の姉の手前を恥じ、一生懸命に泣く真似をしていた。³⁰

これについて、三嶋護氏「ここには、死にゆく母とその息子という役割から本質的に疎外されて、演じることによってしかそのドラマに参加できない(僕)の姿が示されている。」³¹と述べている。芥川にとって、ベットの上にいる虚弱な女は実母であるが、母愛を感じたことがないので、違和感が生じるのも止むを得ないことであろう。とはいえ、芥川の考えでは、僕の泣

かれない以上、僕の母の死ぬことは必ずないと信じていた。³²つまり母を死なせたくないという願望をも抱いている、彼の気持ちは複雑なものであった。実母は死ぬ前に正気に返ったみたいに芥川と姉の顔を眺めながらぼろぼろ涙を落した。ここでは狂気の実母が子供をかわいがっていることができないという遺憾な気持ちを子供に伝えて、母が子に対する最後の母愛とは言える。実母を亡くした後、彼は永遠に母と親しむ機会がなくなり、母愛を味わう事はもう二度と許されないから、納棺の儀式が終わった後芥川がときどき泣いたりしていたのはここに原因があったのではないであろうか。

(二)の部分は芥川家の長女で、まだ小さいときに夭折した龍之介の姉—初子に関する話である。芥川龍之介にとって、初子は見知らない姉であるが、親切感を感じた。芥川は「点鬼簿」を書いているとき、もし初子が生きていたら、もう四十歳を越しているであろう。初子の顔は実母の顔に似ているかもしれないと考えた。そして、

僕は時々幻のように僕の母とも姉ともつかない四十
恰好の女の人が一人、どこから僕の一生を見守っている
ように感じている。³³

ここでは、初子と実母がぴったりと重なっている。芥川は初子のイメージを母性化になって、彼女と実母は永遠に自分を見守ってくれると信じていた。しかし初子と実母が死んだので、もう芥川のそばで見守ってくれることができなくなった。だからここでは初子と実母のイメージが昇華され、彼等はまるでマリアのように暖かくて慈愛な光を照らし、宇宙のどこかで芥川の一生を見守ってくれるように描かれている。実母は平凡であるが、芥川にとって「永遠なるもの」である。

(三)の部分は父について語った短篇であるが、母性像と直接的な関連性がないので、ここで省略する。次いで、(四)の部分は芥川が大正十五年三月の半ばに妻と墓参りの話である。

僕は墓参りを好んではない。もし忘れていられるとすれば、僕の両親や姉のことも忘れていたいと思っている。が、特にその日だけは肉体的に弱っていたせいか、春先の午後の日の光の中に黒ずんだ石塔を眺めながら、一体彼等三人の中では誰が幸福だったろうと考えたりした。

かげろふや塚より外に住むばかり

僕は実際この時ほど、こう云う丈艸の心もちが押し迫って来るのを感じたことはなかった。³⁴

墓参りの芥川はいったいどんな心境を持っていたか。彼は何故丈草の句を思い出したのであろうか。三好

行雄は「水草の句には、〈芭蕉翁の墳にまふでゞ我病身をおもふ〉の前書きがある。墓のそとに住む現身をかげろうと観じつつ、やがて死すべき命運を推しはかる。」³⁵と述べた。ということは、大正十五年のとき、もう自殺を決意した芥川は水草の心情も痛切に感じたと思われる。芥川は自分の死を予感して、遺憾を残したくないので死の前に両親と和解する気持ちが湧いてきたのである。特に長い間続いていた実母に対する抑制や恐怖から解放されたい。彼は「点鬼簿」の発表によって最後の理想的な母性像を描きながら、母子和解の願望が叶えたとと思われる。

東郷克美は、「点鬼簿」で、狂人の母をもつ生い立ちの秘密を告白したことはひたすら築きあげて来た虚構の世界を破砕し、、、自己存立の最後の拠点としての文学を放棄することであり、、、この時期の芥川は強い敗北感の中で認めざるを得なくなっている。」³⁶と指摘している。しかしながら、筆者はこの敗北感という論点について賛成しかねる。

芥川はやっと「点鬼簿」で自分の隠していた秘密を告白したからである。自分の禁忌を破って告白できたことは評価に値することである。三好行雄も「彼は死を賭けて、宿命からの解放に成功したのである。こうして、芥川龍之介はようやく、みずからの宿命をまじろぐことなく見すえることができた。」³⁷と述べている。私見では、芥川は自分の死を予感したので、死の前に積極的に両親と和解したいのである。また、実母は素朴で平凡であるが永遠なるものというイメージは芥川にとっては変らない事実であろう。これらは彼の真実な体験である。つまり芥川はやがて宿命を真正面から正視し、積極的に受け止め、その宿命に対する真の認識から解放されたことであろう。こうした発想から、「点鬼簿」はけっして芥川の敗北とはいえず、逆にこれは彼にとっての再生だと考えてもいいのではないだろうか。

3.5.2 「西方の人」と「続西方の人」

「西方の人」は1927（昭和2）年8月雑誌「改造」に初出した作品である。さらに絶筆となる「続西方の人」は同年9月『改造』に発表された。二篇はキリストの一生を自身の一生となぞらえて語ったものである。「西方の人」「続西方の人」が語られる時は、芥川の死と深く関わってくるのが必然的なことである。本稿は、「母性像」の究明が主旨であるため、死の問題を別の機会にゆずる。ここではこの両作に映っているマリア像を通じて、マリア像と芥川後期の心の底に持っていた理想的な母性像とどんな共通点が見出せるか、ということを探究する。また、実母発狂の関係で

母性認識の道程に挫折した芥川は死の直前に潜む願望の母性像は一体どのようなイメージがあるかを究明したい。

「西方の人」と「続西方の人」の中に描いたマリアと聖書の聖母マリアとの違ったところについて、笹淵友一は「カトリックの聖母観から西方の人のマリア像を解放し、要するに平凡で、保守的な女性像として捉えたのである。」と³⁸述べている。筆者は笹淵氏の論点に賛成する。聖書の聖母マリアは人に崇拜され、礼拝の対象として作られたが、「西方の人」「続西方の人」のマリア像は崇高な魂が見えないながら、却って素朴、自然、平凡、我慢強い、などの性格をもっているキャラクターである。例えば、「西方の人」2に、マリアのイメージについて以下のように述べた。

*我々はあらゆる女人の中に多少のマリアを感じるであらう。同時にまたあらゆる男子の中にも——いや、我々は炉に燃える火や畠の野菜や素焼きの瓶や巖畳に出来た腰かけの中にも多少のマリアを感じるであらう。マリアは「永遠に女性なるもの」ではない。唯「永遠に守らんとするもの」である。キリストの母、マリアの一生もやはり「涙の谷」の中に通っていた。が、マリアは忍耐を重ねてこの一生を歩いて行った。世間智と愚と美徳とは彼女の一生の中に一つに住んでゐる。*³⁹（「西方の人」2 マリア）

ということは、ここで芥川龍之介の描いたマリアはただ自然、平凡な女性であり、炉に燃える火、畠の野菜、巖畳に出来た腰かけの中にも見ることができる。芥川の描くマリアはいわゆる我々のそばの母だと考えられる。ここのマリアは崇拜、理想高なイメージを捨てて、より人間的な形象で彫り上げられる。また、マリアはどんなことに遭っても我慢して、引き受けた。彼女は人間苦の途に上り出し（「西方の人」6 羊飼いたち P436）、「涙の谷」を通っても、キリストのそばに永遠に守っている。こんなマリアは一見何の特徴もなく平凡な一人の婦人と思われなくてもいいが、味わえば味わうほど、こんなマリアは平凡の中で、実は不平凡の一面も我々に現すことができる。そして、「続西方の人」にも、

平和に至る道は何びともキリストよりもマリアに学ばなければならぬ。マリアは唯この現世を忍耐して歩いて行つた女人である。⁴⁰

（「続西方の人」11 或時のキリスト）と描写している。ここの「忍耐して歩いて行く」と「西方の人 2」のマリアのイメージと重なっている。また、「点鬼簿」に、芥川は「僕は時々幻のように僕の母とも姉ともつかない四十恰好の女人が一人、どこか

から僕の一生を見守っているように感じている。」という実母に対する願いことを述べた。「点鬼簿」の「僕の一生を見守っている」と「西方の人 2」の「永遠に守らんとするもの」とのイメージが重なっている。ここから見ると、「点鬼簿」、「西方の人」、「続西方の人」三作が一脈相通して、芥川は「点鬼簿」に現れている、実母に対する理想的な母性像を「西方の人」「続西方の人」でさらに昇華させ、マリア像として描かれている。ちなみに、芥川は「点鬼簿」で実母が狂人ということを告白した。さらに「一生を見守っている」という潜んだ願いも話した。秘密を公開した後の芥川は心境が転換することができて、やっと宿命から解放された。これは実母が芥川に対する母性救済であろう。

芥川龍之介が初、中期のとき抑制していた母性への憧れをある作品では無意識に潜んでいた理想的な母性像として一気に漏らしてしまった。例えば、「偷盗」の阿濃と「捨児」から優しい母親の姿が見える。これについて、鈴木秀子は以下のように論じた。『「偷盗」で母による救済を、無意識のうちに芥川は試みている。それが後年、クリストの母なるマリアに結晶してゆくとみる。』⁴¹「偷盗」の阿濃と「捨児」の母は平凡、我慢強いなどの特質があり、芥川最後の理想的な母性像の雛形だと私は見ている。例えば、「偷盗」に、白痴に近い阿濃は盗人たちに嘲笑され、いじめられてもずっと忍耐して歩いていた。母になる喜びをひたすらに感じているから、人からの嘲笑、いじめられを無視できたのであろう。こんな平凡な女性の上に、世間の智と愚と美德を身につけている「西方の人」のマリアと彷彿する。これらの特徴が近いが、芥川最後の願望である母性像は、「捨児」の母のような「母以上の人間」のではなく、「偷盗」阿濃のように世界救済として造型されたのではなかった。つまりこの二人のように偉大、完璧な母性像とは言えなかった。

三好行雄は「龍之介のえがくマリアは〈永遠に守らんとするもの〉の象徴であり、まさしく純粹にして無垢な永遠の〈母〉である。……、マリアを〈クリストの母〉と呼んだとき、その聖なる母の像は、龍之介が無意識の深層に秘めつづけてきた〈願望の母〉のイメージと、おそらくぴったりと重なっていたはずである。』⁴²と述べている。この論点について、まだ討論する余地が残っていると思われる。それはつまり芥川が最後の描くマリアは無垢な姿という神聖なものより、むしろ素朴、自然、我慢強いなど、人間的な特質と言ったほうがもっと適当ではないであろうか。

私見では、実母もマリアと同じく素朴で平凡な女性である。「偷盗」の阿濃と「捨児」の母のように無垢

で、偉大な母性像には至らないが、人生の道で子供の一生を見守り続け、絶えず忍耐していたに違いないだろう。これはやっと宿命から解放された龍之介が、声をかけて呼んだ「母」のイメージであり、芥川の最後の理想的な母性像だと考えられる。

4. 終わりに

芥川の各時期の作品を通して、彼の母性認識のプロセス、つまり母親に対する感情の抑制から母性謳歌までの心境の変化が伺える。芥川は実母の欠如の影響で、初期作品には母性に対する描写は抑制的、禁忌的であった。例えば、「手巾」の西山夫人は武士道精神を体現するため、自然な母性を封殺して、子に対する自然な感情を抑制するというようになった。しかし、「偷盗」は初期の一つの例外だと考えられる。母性描写の抑制ではなく、阿濃を通じて、芥川の無意識の中で、完璧で無垢な母性像が描かれているのである。中期前半になると、母性に対する芥川の恐怖感が依然として存在していると伺える。例えば、「女」に、雌蜘蛛に托して、女は残虐、凶悪の一面があることを示した。そして「母」に、敏子は隣の赤ん坊の死に烈しい幸福の微笑を浮かべたから女の嫉妬心、悪属性が窺えた。中期後半の作品は一変して、芥川の母性思慕が少しずつ浮んできた。例えば、「少年」に、「少年」に、保吉が芥川と見なして、芥川は無意識に〈仮現の母〉を呼び掛ける声が聞えてきた。「大導寺信輔の半生」に、芥川は母親のことを告白したがったが、最後は言い出せなかった。しかし、白牛の瞳から芥川の母親への思慕と捉えられる。次いで、後期になると、「点鬼簿」には、芥川はやっと実母が狂人だったことを告白し、母が自分の一生を見守っていることを願っていた。また死の前に両親と和解するに至ったことも母親への気持ちの転換と捉えられる。「点鬼簿」はいわゆる芥川龍之介の作品の曲がり角だと言える。最後に、「西方の人」と「続西方の人」に至ると実母とマリアとのイメージが重なり、素朴、忍耐、平凡な実母であるが、子供の一生を見守り続ける。ここから芥川の最後の母性謳歌が見られるし、彼の理想的な母性像がより一層鮮やかに浮き彫りになった。

本稿では、芥川龍之介の心境転換及び母性像の内面描写について、まだ不十分なところがある。そして、この発表で触れていない芥川の各時期に母性像に関する作品もまだほかにあるが、これからは引き続きそれらを究明したい。また、母性像を始め、さらに芥川龍之介における女性像というテーマを目指して、これを今後の課題としたい。

参考文献

論文：

1. 登尾豊 「〈告白〉への過程—「点鬼簿」論」『国文学解釈と教材の研究』、學燈社 1975、2 東京
2. 東郷克美 「『玄鶴山房』の内と外—「山峽の村」の意味をめぐる—」『日本文学研究資料叢書 芥川龍之介Ⅱ』、日本文学研究資料刊行会編 有精堂 1977 東京
3. 鈴木秀子 「母」『芥川龍之介必携』、三好行雄編 學燈社1981 東京
4. 片岡哲 「女」（菊地弘、関口安義、久保田芳太郎 1985 『芥川龍之介事典』 明治書院 東京）
5. 笹淵友一 「西方の人論」『芥川龍之介作品論集成 第3巻 西方の人』石割透編 翰林書房 1999 東京
6. 浅野洋 「手巾私注」『芥川龍之介作品論集成 第4巻 舞踏会』、清水康次編 翰林書房 1999 東京
7. 宮坂覺 「芥川龍之介小論—その溯行・「点鬼簿への軌跡—」」『芥川龍之介作品論集成 第4巻 舞踏会』、清水康次編 翰林書房 1999 東京
8. 三嶋讓 「「点鬼簿」を読む—〈母〉の物語から〈父〉の物語へ—」『芥川龍之介作品論集成 第4巻 舞踏会』、清水康次編 翰林書房 1999 東京
9. 仁平道明 「芥川文芸における〈救済〉」『2007年台大日本語文創新国際学術研討会論文集』 立昌出版社 2007 台北

単行本：

1. 吉田精一 1958 『芥川龍之介』 新潮社 東京
2. 三好行雄 1976 『芥川龍之介論』 筑摩書房 東京
3. 三好行雄 1981 『芥川龍之介必携』 學燈社 東京
4. 菊地弘・久保田芳太郎・関口安義編 1985 『芥川龍之介事典』 明治書院 東京
5. 菊地弘 1994 『芥川龍之介—表現と存在—』 明治書院 東京
6. 平岡敏夫 1995 『芥川龍之介と現代』 大修館書店 東京
7. 関口安義・庄司達也編 2000 『芥川龍之介全作品事典』 勉誠出版 東京
8. 海老井英次 2003 『芥川龍之介一人と文学』 勉誠出版 東京

テキスト：

1. 芥川龍之介 1968 『芥川龍之介全集7』 角川書店 東京
2. 芥川龍之介 1986 『芥川龍之介全集1』 筑摩書房 東京
3. 芥川龍之介 1987 『芥川龍之介全集4』 筑摩書房 東京
4. 芥川龍之介 1987 『芥川龍之介全集5』 筑摩書房 東京
5. 芥川龍之介 1987 『芥川龍之介全集6』 筑摩書房 東京
6. 芥川龍之介 1989 『芥川龍之介全集7』 筑摩書房

東京

7. 芥川龍之介 1996 『芥川龍之介全集 第三巻』 岩波書店 東京

注

- 1 森啓祐 「敏二という名の弟」『芥川龍之介の父』 桜楓社 昭和49、2 東京
- 2 芥川龍之介 1996 『芥川龍之介全集 第三巻』 P93 岩波書店 東京
- 3 吉田精一 昭和33年 『芥川龍之介』 P17 新潮社 東京
- 4 三好行雄 昭和51年 『芥川龍之介論』 P247 筑摩書房 東京
- 5 浅野洋 「手巾私注」『芥川龍之介作品論集成 第4巻 舞踏会』、清水康次編 P14 翰林書房 1999 東京
- 6 三好行雄 昭和51年 『芥川龍之介論』 P22 筑摩書房 東京
- 7 三好行雄 昭和51年 『芥川龍之介論』 P103 筑摩書房 東京
- 8 海老井英次 「「偷盜」への一視角」（『語文研究』第31.32合併号 1971・10→ 1988・2 『芥川龍之介論攷』 桜楓社 東京）
- 9 仁平道明 「芥川文芸における〈救済〉」『2007年台大日本語文創新国際学術研討会論文集』 P49 立昌出版社 2007 台北
- 10 芥川龍之介 1986 『芥川龍之介全集1』 P356 筑摩書房 東京
- 11 片岡哲 「女」（菊地弘、関口安義、久保田芳太郎 昭和60年 『芥川龍之介事典』 P109 明治書院 東京）
- 12 三好行雄 昭和51年 『芥川龍之介論』 P250 筑摩書房 東京
- 13 芥川龍之介 1987 『芥川龍之介全集4』 P253 筑摩書房 東京
- 14 芥川龍之介 1987 『芥川龍之介全集4』 P257 筑摩書房 東京
- 15 芥川龍之介 1987 『芥川龍之介全集4』 P255 筑摩書房 東京
- 16 三好行雄 昭和51年 『芥川龍之介論』 P251 筑摩書房 東京
- 17 芥川龍之介 1987 『芥川龍之介全集4』 P262 筑摩書房 東京
- 18 三好行雄 昭和51年 『芥川龍之介論』 P242 筑摩書房 東京
- 19 三好行雄 昭和51年 『芥川龍之介論』 P245 筑摩書房 東京
- 20 芥川龍之介 「澄江堂雜記」『芥川龍之介全集7』 P132 角川書店 昭和43、6 東京
- 21 三好行雄 昭和51年 『芥川龍之介論』 P246 筑摩書房 東京
- 22 芥川龍之介 1987 『芥川龍之介全集5』 P423筑摩書

- 房 東京
- 23 芥川龍之介 1987『芥川龍之介全集5』P424 筑摩書房 東京
- 24 芥川龍之介 1987『芥川龍之介全集5』P424 筑摩書房 東京
- 25 菊地弘 平成6年『芥川龍之介—表現と存在—』P100 明治書院 東京
- 26 宮坂覺「芥川龍之介小論—その溯行・「点鬼簿への軌跡—」『芥川龍之介作品論集成 第4巻 舞踏会』、清水康次編 P217 翰林書房 1999 東京
- 27 登尾豊「〈告白〉への過程—「点鬼簿」論」『国文学解釈と教材の研究』、P127學燈社 昭和50、2 東京
- 28 芥川龍之介 1987『芥川龍之介全集6』P98 筑摩書房 東京
- 29 芥川龍之介 1987『芥川龍之介全集6』P98、99 筑摩書房 東京
- 30 芥川龍之介 1987『芥川龍之介全集6』P100 筑摩書房 東京
- 31 三嶋讓「「点鬼簿」を読む—〈母〉の物語から〈父〉の物語へ—」『芥川龍之介作品論集成 第4巻 舞踏会』、清水康次編 P228 翰林書房1999 東京
- 32 芥川龍之介 1987『芥川龍之介全集6』P100 筑摩書房 東京
- 33 芥川龍之介 1987『芥川龍之介全集6』P104 筑摩書房 東京
- 34 芥川龍之介 1987『芥川龍之介全集6』P107 筑摩書房 東京
- 35 三好行雄 昭和51年『芥川龍之介論』P254 筑摩書房 東京
- 36 東郷克美「『玄鶴山房』の内と外—「山峡の村」の意味をめぐって—」『日本文学研究資料叢書 芥川龍之介Ⅱ』、日本文学研究資料刊行会編 P146 有精堂 1977 東京
- 37 三好行雄 昭和51年『芥川龍之介論』P254 筑摩書房 東京
- 38 笹淵友一「西方の人論」『芥川龍之介作品論集成 第3巻 西方の人』、石割透編 P206 翰林書房 1999 東京
- 39 芥川龍之介 1989『芥川龍之介全集7』P433、434 筑摩書房 東京
- 40 芥川龍之介 1989『芥川龍之介全集7』P475、476 筑摩書房 東京
- 41 鈴木秀子「母」『芥川龍之介必携』、三好行雄編 P30 學燈社1981 東京
- 42 三好行雄 昭和51年『芥川龍之介論』P255 筑摩書房 東京

ばく えんてい／台湾大学 日本語学科 大学院3年生 文学専攻
miyuki2031@yahoo.com.tw